

どんぐり (団栗)

10月

どんぐりと言えば、どんぐりコロコロでおなじみの木の実で、ブナ科の果実の総称である。植物名ではないのでカタカナ表記はしない。なかでもコナラ属、シイ属、オニガシ属の果実はコロコロしていてどんぐりと呼ぶにふさわしい形をしている。どんぐりの下部にあるのは、皿あるいはお椀と呼ばれる殻斗であり、その形状で属や亜属、さらに種や亜種に分類されている。

どんぐりとしてもっとも親しまれてきたのはコナラ属であろう。コナラ属は落葉広葉樹のコナラ亜属と常緑広葉樹のアカガシ亜属に分けられる。コナラ亜属の殻斗はたくさんの鱗片がうろこ状になっているが、アカガシ亜属は鱗片が同心円状になっている。くらしの植物苑では、コナラ亜属のイチイガシ、カシワ、クヌギ、コナラ、ナラガシワ、アカガシ亜属のアラカシ、シラカシがみられる。

クヌギやシラカシなどの木材は、木炭の原料としても広く使われている。木炭には、1000℃以上の高温で作る白炭と、700℃以下で作られる黒炭があり、近世にお茶用の炭として知られていた「佐倉炭」はクヌギから作られる黒炭であった。白炭の代表格は、現在でもよく知られている「備長炭」で、ウバメガシ（コナラ亜属）を原材料とする。

どんぐりはすべて食用となり、縄文時代から、オニグルミ、トチノキとともに主要な食

料であった。これらは堅い果皮で種子が覆われているので堅果類と呼ばれる。クリもブナ科の植物であるが、クリの果実はあえて、どんぐりと呼ぶことは少なく、クリと言えばクリの果実を指す。クリは、他のどんぐりに比べて、タンニンという渋み成分が少ないので容易に加工でき、甘み成分が多いのでお菓子にも利用されてきた。クリのイガイガは、どんぐりのお椀と同じ殻斗であり、イガイガが密集する独特の形から、他のブナ科植物とははっきり区別される。

関東平野にはブナ科シイ属の代表種スダジイが広く分布し、渋み成分が少ないので古くから食用とされてきた。どんぐりは小さいもののピーナッツのようにおいしく、生食する人もいるくらいである。このほか関東平野にはオニガシ属のマテバシイがある。本州では最大のどんぐりを実らせ、スダジイ同様に美味な果実である。くらしの植物苑では、スダジイと園芸種の斑入りスダジイが、マテバシイは城址公園内でみられる。



三内丸山遺跡模型 第一展示室

三内丸山遺跡は、青森県にある縄文時代前中期（紀元前約3900～2200年）の大規模な集落跡。人為的なクリ林が作られていたことが明らかにされている。



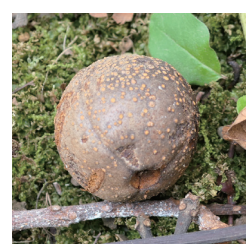
コナラ



アラカシ



クヌギ



トチノキの実



オニグルミの実

トチノキ、オニグルミ、クリは春の号で取り上げています。  
<https://www.rekihaku.ac.jp/exhibitions/plant/culture/2023/001.pdf>

11月

色づく木々

秋になると、落葉広葉樹や落枝針葉樹の葉は急に色づいてきて、あるものは紅葉し、あるものは黄葉する。紅葉の代表はカエデ属の仲間、紅葉と言っても黄色から紅・紫色に変化する。黄葉の代表は、イチョウ、ユリノキ、カラマツである。

気温が下がり、日の当たる時間が短くなると、葉と枝、あるいは枝と小枝の境に離層と呼ばれる壁が形成される。緑色の葉緑素が分解されるとともに、光合成の産物である糖分が葉から移動できず、その場でアントシアニンという赤から紫色の色素に変化する。また、植物には、カロチノイドという黄色の色素を多く含むものもあり、葉緑素が少なくなると黄色が際立つようになってくる。それらの割合の違いによって木々は急激に色づいていく。

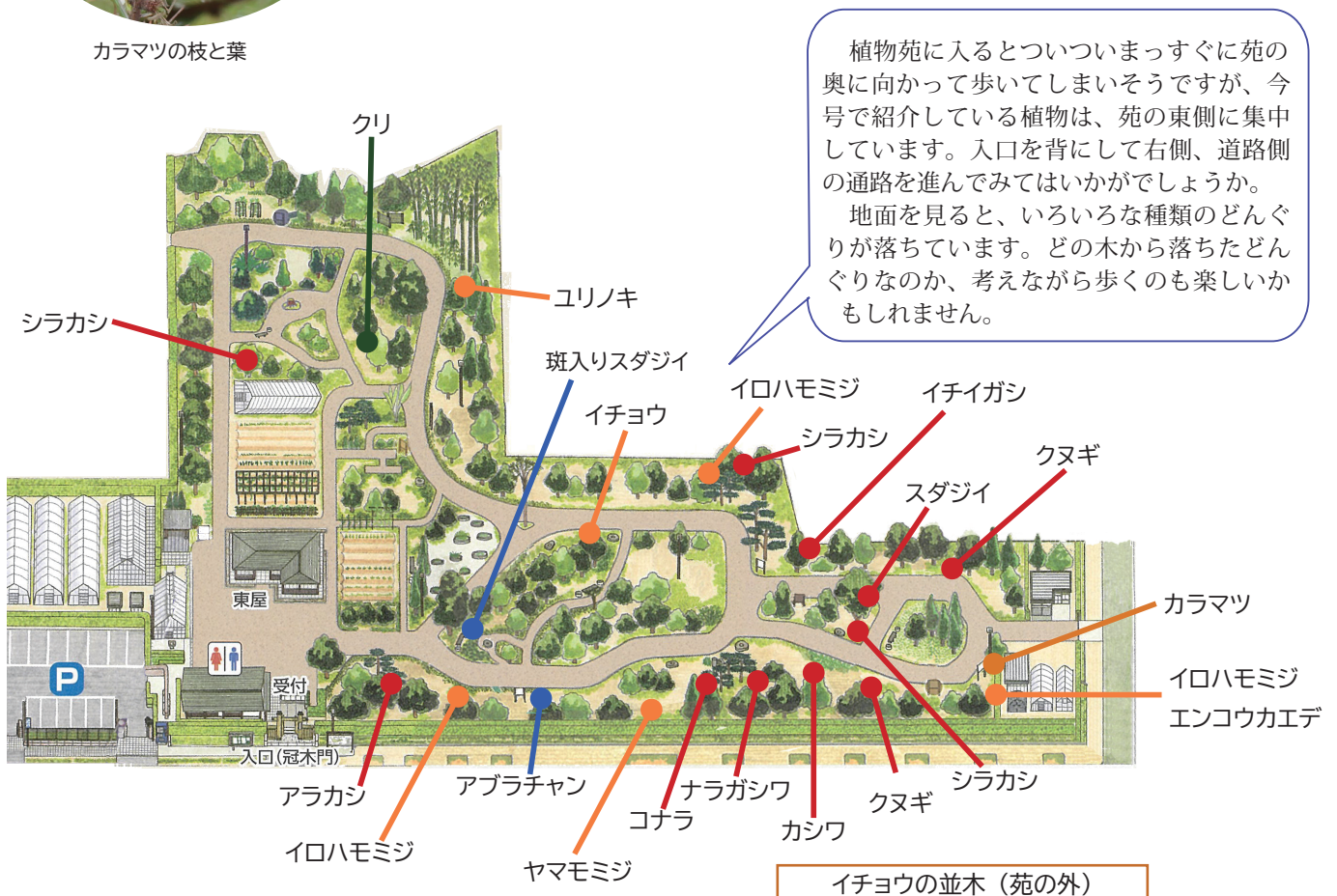
カラマツ

カラマツはマツ科カラマツ属の針葉樹。針葉樹でありながらみごとに黄葉するのはカラマツだけである。北原白秋はカラマツを落葉松と呼んでいるが、落葉するのではなく落枝する。枝が短く詰まっているのであたかも葉が落ちるように見えるのだ。落葉広葉樹の落葉性とは違って、これを落枝性という。



カラマツの枝と葉

落枝性の針葉樹といえばメタセコイア、枝がはっきりわかるメタセコイアとどう違うのか比較してみると面白い。カラマツの自然分布は志賀高原で見られるが、10月から11月はまっ黄色になってみごと。植林されたカラマツ林は秋の軽井沢を彩っている。くらしの植物苑では東の隅っこで黄葉しているので、足を延ばしてぜひ観て見よう。





## ユリノキ

くらしの植物苑の北東部にはユリノキというまっすぐに背伸びした巨木がある。10月から11月にかけて木全体があざやかに黄葉することで際立っている。ユリノキというきれいな名前は、リリオデンドロンというユリノキ属の学名に由来する。リリーはユリ、デンドロンは木、すなわち学名の直訳である。現在、ユリノキ属は世界に2種だけが生き残っており、北米中央部にユリノキが、中国東南部にシナユリノキが分布するが、かつて数百万年前では日本でもふつうに見られた。北半球で広く化石が発見されたことで、生ける化石として一躍注目されるようになった。

ユリノキは成長が早く高さが30メートルほどになり、単独木のため黄葉時には遠方からでも確認で

きる。樹形がまっすぐで、花もチューリップのようにきれいなため、各地に街路樹として植えられている。残念なことに成長が早いため幹や枝が切られてしまい、本来の単独木の奇麗さは失われている。北米から日本に持ち込まれたのは明治になってからである。



ユリノキ

少しずつ、黄色の葉が増えてきています。

## カエデの仲間

カエデ属は、葉や果実が対生に着いていて、秋には紅葉あるいは黄葉して落葉する。紅葉するものはモミジと呼ばれるが、紅葉するものも黄葉するものも葉がカエルの手のようになるものをカエデと総称する。カエデの仲間はかつてカエデ科とされたが、いまではトチノキ科とともにムクロジ科にまとめられている。

カエデ属は紅葉・黄葉する代表的な植物であるが、4月から5月の鮮やかなカエデ属の紅葉や葉の形を觀賞することも江戸時代から行われてきた。くらしの植物苑には江戸時代以来の觀賞用のカエデ属のまとまったコレクションがあり、葉緑素の鮮明な緑色、アントシアニンの鮮明な紅色、そして多様な葉形のカエデ属が秋だけでなく春でも楽しむことができる。



イロハモミジ



江戸図屏風 右隻 第四扇 (本館蔵)

紅葉をめぐる紅葉狩りは、平安時代には貴族の間に広がっていました。江戸時代になると庶民も紅葉狩りを楽しむようになります。江戸の様子を描いた『江戸図屏風』にも所々に紅葉を思わせる赤や黄色に彩色された木々が描かれています。



## イチョウ



イチョウは恐竜時代とも言われる中生代に繁栄した多種多様なイチョウ科の末裔といってもよい。かつて200万年ほど前までは日本にもふつうに生育していたが、氷河時代の到来で急速に消滅し、中国に生き残ったとされている。ただし中国で自然の状態に生育している様子はいまだに確認されていない。日本では中世の15世紀ころに最初の記録があり、神社・寺院の御神木として各地に広まっていったようである。おそらく中国仏教の禅の普及が関係していたのであろう。

イチョウには特異な性質が見られる。葉の基部の葉柄には2本の維管束があり、葉身で無数に分岐して末広がりになること。これは無限の宇宙を表しているのではないだろうか。寿命が長く、全国に巨木が生き残っている。そのため生命力のある長寿木として崇められている。秋深くの見事な

黄葉は太陽の生命力とされることもある。雌雄異株で、雌の木にはおびただしい銀杏（ぎんなん）ができ、子孫繁栄の象徴ともされる。

くらしの植物苑の前には城址公園に向かってイチョウの街路樹が林立する。10月ともなれば見事な黄葉とおびただしい雌の木の銀杏が楽しめる。



植物苑前のイチョウの並木

2023年10月4日撮影。黄色くなるのはもう少し先になりそうです。

## アブラチャン ー油の採れる植物①ー

アブラチャンはクスノキ科クロモジ属を代表する植物。その名が示すように、全身が油でみなぎっているといってもよい。油を採るのは主として種子からで、江戸時代に書かれた『農稼業事』（児島如水著）によれば、一石（180L）の果実からおよそ四斗（72L）の油が採れたとのこと。かつては灯用に利用された。くらしの植物苑では道路側に低木があり、10月になれば球形のおびただしい果実が枝もたわわに実っている。葉も枝もふんだんに油を含んでおり、生木でさえ火が付くほどである。



アブラチャンの木

今年は実がすでに落ちてしまっているようです。3月に咲く黄色の花をぜひ見に来てください。



本館第二展示室

「かわらけ」と呼ばれる素焼きの皿に油を入れ、麻などの灯芯を浸して火をつけて灯とした。

## 書籍紹介 ー縄文人の植物利用ー



2013年刊行

工藤 雄一郎 / 国立歴史民俗博物館編 (新泉社)



2017年刊行

縄文人の植物利用について詳しく書かれた書籍が出ています。興味を持たれた方は、ぜひ手に取ってください。

くらしの植物苑では、縄文時代から使われてきた植物を紹介するワークシートも用意しています。

歴博ホームページでは「みごろの花」も紹介しています。



国立歴史民俗博物館  
National Museum of Japanese History

2023年10月18日発行

文・写真：辻誠一郎（東京大学名誉教授） 編集：島津美子（本館研究部）